平成2年3月
3巻1号

日本口腔インプラント学会誌

Journal of Japanese Society of Oral Implantology

日口腔インプラント誌
JJSOI

ISSN 0914-6695

1990

日本口腔インプラント学会

C-2-23. アパセラムの臨床成績について

（鶴見大歯・口外）
渡辺　孝夫，野村　隆祥，岩野　清史
中尾　　泉，松浦　正朗，瀬戸　晥一

昭和59年12月より2年8カ月の間に，患者17人に対しアパセラム人工歯根30本を植立，最終植立より1年4カ月経過後，昭和63年12月に臨床経過を集計した．内訳は男5人，女12人，平均年齢47.8歳，部位は上顎6本，下顎24本であった．

結果：① 脱落は6本，このうち4本は上顎，しかも補綴物装着以前の自然脱落であった．② 破折は8本，いずれも補綴物装着後に生じた．また，人工歯根の幅径の細太と破折数の分布との間には明らかな関係は認めなかった．③ 通算体内期間は平均21カ月，最小35日（自然脱落）．内容は植立から補綴物装着までの期間が平均11カ月（最小6カ月），補綴物装着から脱落，破折までが平均6カ月（最小は装着時の指圧による破折例）であった．④ X線写真にて人工歯根周囲密着歯槽骨高径を計測した．その結果，植立時は脱落・破折群は残存群と同程度の高径を示していたが，その後は急激な高径の減少をきたし脱落，破折に至っていた．内容をみると脱落群，破折群はいずれも同様な変化であること，補綴物装着前，後にかかわらず生じていること，および残存群も僅かであるが同様な変化がみられた．⑤ 残存例は密着歯槽骨高径の低い群（平均 3.6 mm）と高い群（同 8.8 mm），いずれも6本の2群に分かれた（不明2本）．

ノオテスト値はいずれも負領域であったが発赤，排膿
の炎症症状は前者が5例，後者はみられず，高径と炎
症状に負の相関がみられた，その他プラーク付着など
生状態，非角化粘膜等については明確な関係は認めな
った．⑥ 植立後補綴物装着状態に至ったもの26本，
7%．集計時機能的負荷状態にあったもの14本，こ
ま全体から患者の都合で未装着であったもの2本を除
た本数28本のうちの50.0%，さらに周囲の歯肉に炎
症状がみられず，かつX線写真にて辺縁歯槽骨吸収が
度なものは6本，21.4%であった．

質　問　　藤井　俊治（東女医大）

発表する教室によって成功例のパーセンテージがかな
異なるが，これは手技的な問題か，材質的な問題か．

回　答　　渡辺　孝夫（鶴見大）

1）本インプラントを生体に植立した場合の基本的な
質として，組織親和性と異物反応があると考えてい
両者は相反する動きをする訳で，このバランスが臨
成績に現れるのではないかと考えている．
2）今後の使用に関しては，ケースバイケースに考え

回　答　　瀬戸　晥一（鶴見大）

義歯が癌発生の誘因であることは古くからいわれてい
が，確たる因果関係はわからない．実際癌患者の所見
ら義歯との関連が強く推定されることは多いが，義歯
着者の実数からするとその因果関係を立証するのは困
である．